

綴葉

ていよう

'19 10

No.381

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

山口尚著『幸福と人生の意味の哲学:なぜ私たちは生きていかねばならないのか』
菅孝行著『天皇制と闘うとはどういうことか』

特集／1000円で買える本

新刊コーナー／新書コーナー／『夏物語』の風景／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/

 **univ.** 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

「幸福」と「人生の意味」はいかに示されるか

幸福と人生の意味の哲学

なぜ私たちは生きていかねばならないのか

山口尚著 トランスビュー



おそらくは、「幸福」や「人生の意味」ほど、多くの者を惹きつけてきた哲学上のテーマもないだろう。近年、日本語で書かれたその入門的な著作が相次いで刊行されているところでもあるが、それらのほとんどは、哲学・倫理学の学説でガチガチに固められた「学術書」か、学説などお構いなく著者の（安易な）経験論に裏打ちされた「自己啓発書」かの二つに一つである。本書はしかし、その意味でどちらの部類にも属さない。これまで述べられてきた「幸福」論や「人生の意味」論の諸説に批判・検討を加えながらも、理念的な次元にとどまらず、私たちの日常生活に寄り添ってくれる。

本書は、大学の全学共通科目で倫理学の講義を担当する山口尚が、「幸福」と「人生の意味」について、文学作品などの手頃な事例を参照しながら論じる著作である。誰もがそうありたいと願う「幸福」はなかなか実現しにくく、他方、人生が「何のために」あるかを問うたとき、その意味はなかなか見出しづらい。しかし、山口はここで「幸福こそが人生の意味である」と説く。人生に意味を与えてくれる特定の価値観を「狂信」するのではなく、あくまで自己の価値観を相対化し、その特殊性を自覚する「アイロニー」の姿勢で様々な価値観を疑いつづけること。その先で私たちが「すべてはあ

るがままにある」と見なせる超越的次元に至ったとき、世界内部の個別的出来事の成否に左右されない、超越的幸福が私たちを包み、「人生はあるがままの意味をもつ」のだ、と彼は言う。

本文中で山口が「幸福」や「人生の意味」といったものに向ける眼差しは、一貫しているとともにかなり独特なものでもある。というの彼は、「幸福」や「人生の意味」に私たちが一筋縄で語ることのできない「超越」性を見出ししているのである。この姿勢は、ウィトゲンシュタインの「語りえず示されるもの」に関する議論にも通じるものだが、同時にこのスタンスは、安易に「幸福とは……である」と結論づける、近頃の「幸福」論への山口の痛烈な批判にもよく現れている。したがって、この著作が「幸福」や「人生の意味」の何たるかを明確に述べ、あるいはそれらを指南してくれるようなことは決してない。ただしその分、結論まで含めて、このような概念に定義を与えない（せいぜい「幸福」とは「人生はそのためにある」と言ってもいいくらい）のものと述べる程度である。議論の流れを、私たち読者は、かなり注意深く読み取っていく必要がある。常体と敬体が入り混じる山口の文体（もちろん意図的に用いられたものではあるが）には、慣れるまで読みづらく感じられるところが多いかもしれない。しかし、常体で淡々と語ってしまふのではない、その（不器用な）語りに私たちは、自分の言葉で考えを示そうとする山口の「生きた声」を読み取るべきなのだろう。果たしてその声は、本書を手取るあなたにどう届くだろうか。無論、その言葉の意味するところを「狂信」しては本末転倒なのだが。（八雲）

（二七二頁、本体二四〇〇円、5月刊）

天皇制と闘う拠点を構築する

天皇制と闘うとは どういうことか

菅孝行著
航思社



天皇代替わりと改元の空騒ぎの春がようやく終わると、夏には新元号を冠した政党が躍進し、菊タブーがまたも表現の自由を圧殺した。そしていよいよ秋の即位礼正殿の儀と大嘗祭を迎える。このような情況において、反天皇制思想・運動を長年にわたって牽引してきた第一人者が著した本書には大きな価値が認められよう。

著者によれば、象徴天皇制は国民国家の統治における幻想の共同性という位相、すなわち主権者が内面化した国家の宗教的権威——その源泉たる国家神道は解体されたかに見えて、皇室祭祀は「私事」としては変わらず継続し、権力者たちがそれに参列している——に関わる。したがって反天皇制闘争はそこに特化せねばならないと同時に、天皇制は他の位相、すなわち資本制や政治権力によって都合よく利用されるため、それらとの闘いつく必要がある。そのための陣地戦は、従来の職場や地域に加えて、保育・介護・医療・生活相談・生活支援などの「へいのちの質の支えの場」にアジールを組織し、根拠地を築いて闘わなければならない。工作者は誓約集団を組織してそれらを横断的に連携する使命をもつ。

沖縄の基地問題をめぐる論者とダグラス・ラミスへのインタビュ―も収録されているが、これは県外移設を訴える沖縄の声への本土

の安保粉砕・基地撤去の立場からの応答として重要だ。敗戦後の天皇制存置は本土の非武装化を対価としたが、さらにそれは裕仁の意向も関与しつつ沖縄を犠牲とした。天皇制はこのようなアクチュアルな問題にも影を落としている。他にも、日本の賤民文化に、天皇制的観念体系に規定されながらも新たな神を呼び出すことでそれを異化し覆す営みを見出す評論など、示唆的で刺激的な論考が並ぶ。

現在までの様々な反天皇制論・運動を総括し、新たな闘争の地平を切り開かんとする意義深い本書だが、評者としては明仁に関する論及にやや異論が残る。明仁（と美智子）が「象徴としての行為」の実践を通じて権威を高め続け、その正当化と継続を図った「八・八声明」によって事実上の政治的権能を発揮するまでに至るほどの求心力を獲得してきたことに対する批判が不十分ではないか。著者は「八・八」が形式論的に違憲なのは自明というに留めるが、横田耕一らの解釈に沿えば違憲であるはずの公務の拡張を天皇自ら正当化した点で、形式を超えていわば「解釈改憲」的な問題を孕んでいるはずだ。天皇による幻想の共同性の強化に反対するならば、ここを問題視せずにいられようか。象徴天皇制の増長に歯止めをかけなければ、陣地戦を優位に運べまい。また、明仁の「護憲平和主義」的な「個人」の性格と制度の矛盾を云々する以前に、共感の対象としての天皇の人格や「お気持ち」こそ既に制度に媒介されていることと、市井の人々への然るべき尊敬や同情を天皇が代補していること、イデオロギー性を暴露すべきだろう。さもないければ、陣地戦の根拠地は体制補完的役割を演じることにしかなるまい。

（書人）
（二四六頁 本体三二〇〇円 4月刊）

学生との対話

小林秀雄講義 国民文化研究会／新潮社編
新潮文庫

小林秀雄という名前を聞いて多くの学生が思い浮かべるのは、2013年センター試験の国語で出題された「鐔」だろう。難解な印象ばかり抱かれがちな小林が終生まで脱き続けたことは果たして何だったのだろうか。



本書は、九州各地で小林が学生達に行った講義の文字起こし二編、決定稿一編、そして質疑応答のすべてを収録している。学生たちは「学ぶとは」などの抽象的な質問から本居宣長やベルグソンに関する学問的な質問、あるいは人生に対する質問など、様々な質問を小林にぶつけていく。彼らの質問に対する小林の言葉をよく読んでいくと、小林が「対話」を大切にしていたことが伝わってくる。

小林は、「学ぶには何が最も大切でしょうか」という質問に対し、まず身近な日常生活のことから疑ってみろ、と答えた。疑うこと、つまり問いを立てることに慣れてきたなら、「うまく質問する」ことが重要だ、と小林は言う。良い質問とは、本人にとって切実な問いである。生まれたその切実な問いを自問自答する。しかし、一人で自問自答しているとつい空想に走りがちになる。そこで、必要になってくるものが「対話」だ、と小林は述べる。これは、同じ問いに対する真理に近づくという目的に基づいた対話である。小林はこれを、「理想的な自問自答」と呼んだ。学生との質疑応答を受け、講義を講義録にする際に内容を加筆していることから、小林自身も「対話」を重視していたことが伺える。

相手を一方的に屈服させる「論破」は何も生み出さない。「対話」することを諦めつつある現代を見たなら、小林秀雄は何を私たちと語り合おうとするだろうか。 (石透)

(225頁 本体490円)

特集

1000円で買える本

千円札一枚で何が買えるか。ちょっと贅沢な昼ご飯にありつくるかもしれない。また、古着を一着購入できるか、あるいは、麦酒五〇〇ml缶が二つ三つほど、安い葉巻なら一本……。だが、これら嗜好品や生活の品々ではなく、本に充てることもできるだろう。本にはお金に代えがたい価値が宿っている。たった一冊の本が、知らなかった物の見方や、想像だになかった物語を与え、人生を決定づけてしまうこともある。千円札はこれも同じのただの紙切れだが、それは未知なる世界への一度きりの特別な切符にもなるのだ。さあ、入場券を握りしめ、いざ門戸を叩かん。

(三葉)



ドリアン・グレイの肖像

ワイルド著 仁木めぐみ訳
光文社古典新訳文庫

まだ先のことだと思って
いるかもしれない。しかし
それは必ずやってくる。あ
るいは気付いていないだけ
で、兆しは既に現れている
のかもしれない。——いつ
か、そう、いつか若さ故の
美貌は朽ち果て、肌はボロボロに、皺まみれ
になり、醜く老い果てるのだ。

画家のバジルは、美青年のドリアン・グレイにぞっこんだ。自分の魅力に気付いていないその無垢さも含めて、バジルは彼を気に入る、幾度となく肖像画のモデルを頼んでいる。そこに詭弁を弄する男、ヘンリー卿がやってくる。新しい快楽主義者を自称するヘンリー卿は、まだ世間の汚れを知らないドリアンを説き伏せる。君は、自分の美しさを棒にふるているのだ、若さ、若さこそがすべてなのだ、と。ドリアンはその言葉巧みな技に魅せられ、禍々しくも魅力的な考え方に憑りつかれる。そしてバジルの描いた肖像画を前にして自身の美しさを初めて見出し、思わず叫ぶ。「いつまでも若さを失わないのが僕のほうで、この絵が老いていけばいいのに！」——そのためになら「魂だって」捧げてしまっても構わない、思わず口をついて出た願いは、果たして叶えられた。ドリアンは何年経っても目を見張るような美しさを保っている。だが、彼が快楽まかせに悪事ををはたらくたびに、実は絵のなかのドリアンは唇をよりいっそう醜く歪め、画中の手はついに罪の血で真っ赤に染まってしまうのだ。とうとうドリアンは魂の汚れを露わにする忌まわしい肖像に怒り、刃を突き立て——。

美しさとは、魂とは何か。外貌の美に溺れる青年の運命を描いた、イギリス作家オスカー・ワイルド唯一の長編小説。（三つ葉）
(447頁 本体780円)



後世への最大遺物・ デンマルク国の話

内村鑑三著 岩波文庫

いつの日か歴史的な偉業を成し遂げ、後世まで語り継がれる人物になりたい——誰しも一度は夢見ることだろう。他でもない、若き日の内村鑑三もその一人だった。彼はこう述べている。「この美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河、これらに私が何も遺さずには死んでしまいたくない（中略）私は死んでからただに天国に往くばかりでなく、私はここに一つの何かを遺して往きたい」。

では、私たちはこの世界に何をのこせるのだろうか。一体何をのこせばよいのだろうか。内村の1894年の講演は、この「後世への最大遺物」を論じる。「金」や「事業」「思想」……これらを手にできるのが限られた人だけであることを指摘した上で、彼は「勇ましい高尚なる生涯」こそが「後世への最大遺物」とであると説く。すなわち、「めいめい持っておった主義のために送」られ、様々な「艱難に打ち勝って」いった生涯は、誰にでも叶えられるもので、広く後世の人々に生きる勇気を与える「最大遺物」となるのである。

本書はこの他、19世紀半ば、大国に領土を奪われたデンマークの戦後復興に関する講演「デンマルク国の話」を併せて収録する。どちらの内容も宗教色がやや強いのは、内村のキリスト者としての側面がよく現れている。とはいえ、引き合いに出される事例に洋の東西を問わないという点は、内村の関心の広さと、オープンマインドな精神を感じさせる。

100年以上の時を超えて今も色褪せぬ彼の言葉は、まさに内村自身の「後世への最大遺物」である。立派な生涯を送るという彼の試みは、ここに成功したと言えるだろう。（八雲）
(142頁 本体540円)



はじめてのラテン語

大西英文著
講談社現代新書

千円は決して大金ではない。昼食を買うにしても、良いものを食べるには足りない。どこかに出かけるにしても、旅行といえるほどの距離にはならない。しかし、その千円札で買える本の中には、数か月、いや一生楽しめるようなものもある。

ラテン語の入門書である本書は、そのような本の一例である。新書という形式や「はじめての」という形容は、内容が薄いのではないかという疑念を起こさせるかもしれない。しかし、この本の内容は明らかに通俗的な語学入門書の域を超えたものである。ラテン語の名言や、英語やロマンス諸語などの現代語とのつながりといった一般受けする「面白い」話も、もちろん含まれている。しかし、そうした雑学としてのラテン語の知識ではなく、辞書があれば易しめの文章が読める程度の文法事項と、そうした古典の背景知識を読者に身に付けてもらうことが本書の主な内容である。したがって、三百頁足らずの小さな本であるが、読み方次第で数か月は楽しむことができるだろう。紹介されている単語や変化表をすべて暗記するには、少なくともその程度の時間がかかるはずだ。より細かい事項も覚えるなら、もっと長く読み続けられる。

こうした「読書」は時間の潰し方としてはともかく、それで何の役に立つのか疑う人もいるかもしれない。確かにこれで利益を得ることはないだろう。しかし、こうして得られる古典語のリテラシーは、明らかに人生を豊かにする。例えば、ラテン語の名句や碑文に親しみを感じられるようになるだろう。千円を元手にその程度のことができるならば、十分ではないだろうか。

(蔵餅)

(288頁 本体940円)

ハーメルンの笛吹き男
—伝説とその世界—

阿部謹也著 ちくま文庫

一二八四年六月二六日、その男はやってきた。色とりどりの服を身にまとい、笛を吹くその男は、村を悩ます鼠たちを連れ去っていった。しかし村人は男への報酬を拒んだ。次に笛が鳴り響いた時、消えたのは鼠ではなく一三〇人の子供たちだった。啞者と盲者だけを残して……



グリム童話でも有名な《ハーメルンの笛吹き男》を知らない読者はいないだろう。哲学者ライプニッツは「この伝説には何か真実が隠されている」と言った。ゲーテや、ハイネ、シュベルトまで魅了したこの物語に隠された何かを、歴史的資料をもとに丁寧に探索していくのが本書である。著者・阿部謹也は寓話として有名になった物語を、再び歴史的文脈の中に落とし込み、当時何が起き、どう語られていったのかを分析していく。

何よりもすごいのはその密度だ。出版されていない研究書をドイツの図書館の隅から見つけ出し、中世の手紙や日記にまで遡って分析する阿部謹也。そこから明らかになる、物語の奥に隠された真実。人口過剰を恐れた村の植民地請負人、少年十字軍や宗教改革による対立、漂泊する遍歴楽士。物語の奥には差別や奇習があり、物語の語られ方には悪魔や愛国が出現する。小さな村の一つの事件を紐解くことで、人間の愚かさや弱さ、そして世界の歴史まで見えてくるはずだ。

本書が発売されたのはおよそ三〇年前。歴史を超えた事件を探索した本は、今、時を超えて再びベストセラーになった。あなたも本書を通して多くの人を魅了した伝説の奥にある「何か」に触れてみては。解説は石牟礼道子。

(きもの)

(336頁 本体760円)

聖徳太子

—ほんとうの姿を求めて

東野治之著 岩波ジュニア新書

いかにも「ゆとり」と嘲われそうだが、歴史オタクだった一〇代の頃、聖徳太子はいなくて、鎌倉幕府開幕は1192年ではなくて、武田騎馬隊はいなかった。故に、「脱構築」という言葉を知るはるか前から、自然に歴史的事実は大体仮構であると思っていた。

これは評者の自分語りだが、だからこそ2017年刊の本書『聖徳太子』は「幼年期の終わり」のように見えた。大山誠一著『〈聖徳太子〉の誕生』（吉川弘文館）以後猛威を振った聖徳太子非実在論が著者東野治之や本学教員の吉川真司により下火になりつつあるのは知っていたが、違和感はぬぐえなかった。確かに定評ある「日本の歴史」シリーズを擁する岩波ジュニア新書ではあるが、学術論争の旗頭がその学習を注ぎ込むのにふさわしいレーベルとは思えなかったからである。

しかるに、本書を紐解くと諸々の疑念は氷解した。法隆寺金堂釈迦三尊像銘文をコア資料とし、太子自著とされる法華義疏を実見し、若草伽藍跡の発掘成果と照合し、「過激な知識人」としての同時代の聖徳太子と後世の信仰対象としてのそれを分離していく。新書としてはあまりに重厚な内容は、古代研究に必要な学問分野を一人で兼学した東野がその学習を「ジュニア」に伝えきる本気の一書であることは明瞭だったからだ。

ですます調の柔らかな文体から記紀の史料の価値のディスカウントを大きな目標とした「戦後史学」への吊鐘が聞こえたのは評者の幻聴に非ず、恐らく聖徳太子実在論争の一つの決定打として読み継がれよう。青少年のみならず、21世紀の歴史学を知りたい「シニア」にも薦めたい一冊。（投稿・とうこ）

（240頁 本体950円）



論語のこころ

加地伸行著

講談社学術文庫

「学びて時に之を習う。亦説ばしからずや」——。言わずと知れた不朽の古典、『論語』のエッセンスを、わかりやすく現代の我々に伝えてくれる。

本書では『論語』から一二〇余の章段を選んで体系化され、それぞれに解説と原文、現代日本語訳が配されている。そのため、漢文に疎くても、現代日本語訳と解説を読むことで『論語』の世界に触れることができる。中でも「論語の名句」という章が面白い。「温故知新」など、『論語』の中には現代の我々にも比較的馴染み深い文章がある。これらについて、その成立情勢やそれぞれの漢字の意味、参考知識等が丁寧に解説されている。

著者は、『論語』の名句について、「その場の前後の話が時間とともに削ぎ落とされで、「そのときのポイントとなるところだけが残った」と説明している。そして、そうであるがゆえに、「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」を「オーバー（過ぎたる）なのはだめだ（及ばず）」と解釈するような、誤用が生じうるという指摘は示唆深い。これらの解説は、『論語』の文章自体は聞いたことはあるが、その意味や成立の背景は知らないという初学者にとっては嬉しいものである。また、「君子」「小人」「仁」など、『論語』に繰り返し出てくる用語も丁寧に解説されているので、『論語』を読む際の助けにもなるだろう。

今更『論語』を読むなど時代錯誤だと思ふ人もいるかもしれない。しかし、『論語』を通して孔子の言葉に耳を傾けると、驚くほど現代の我々に通じるものがあることに気づくだろう。ぜひ本書を片手に、古きを温ねて新しきを知ってほしい。（出席点）

（270頁 本体940円）



新刊コーナー

なかなか暮れない 夏の夕暮れ

江國香織著
ハルキ文庫



小説に熟中しすぎて、現実の生活の音が遠のき、文字へと沈み込んでいく。そんな経験、ないだろうか。

本作品は江國香織による長編小説である。東京在住、五〇歳半ばの穂は作中である小説を読んでいる。画中国画ながら、この小説のなかの小説もきっちり描かれていく。

——ラースは愛人のゾーヤの行方を捜している。彼女の性格からして、連絡もなしに姿をくらますなどあり得ない。そう思ってラースは手がかかりから事態を明かそうとするのだが、思わぬ事件に巻き込まれ——と没頭しているところに、ふいに「穂」と呼ばれて顔をあげると、姉の雀が横にたっていた。最近ドイツから帰国した彼女は穂と一緒に家で読書していたのだ。「お腹すいた」と雀が言う。穂はゾーヤたちの世界を離れ、冷蔵庫に何があ

ったかしらと思いつくとする。午前中にスーパー行っただけ、たしか……。

江國香織はその透きとおるような文体も特徴的だが、また同時に、作中の登場人物を生きたように射せ、ひとりの人格として印象づけるわざにも優れている。実は本書は、作中作のなかも含め、数多くの人物が登場する群像劇なのだが（試しに人物関係図を描こうとしたが、一枚に収まりきらなかった）、人物名をわざわざ覚える努力を要せず、読むのに難儀しない。気軽に不思議な物語へと引き込まてくれる一冊である。

(三七九頁 本体七〇〇円 8月刊)

ある一生

ローベルト・ゼーターラー著
浅井晶子訳
新潮 Crest プックス



誕生から終焉まで一人の一生を眺める時、私たちはそこに、言い知れぬメッセージを見出ししてしまう。人間の一生とは、意味に振り回されたものなのだろうか、それともただただ無意味なものなのだろうか。

本書は主人公アンドレアス・エッガーの一

生を描いたものだ。「未婚の母から生まれた私生児」であったエッガーは、二〇世紀という時代をオーストリア・アルプスで生きた。何も特別なところがない、片足に治らぬ怪我を負った男だった。土地もなければ技術もない、背丈と体力はある男だった。彼の人生には恋があり、戦争があり、月面着陸があった青春があり、喪失があり、忘却があった。エッガーは寡黙な人間だ。語ることもよりも黙ることを好んだ。社交よりも孤独を好んだ。街よりも山が好きだった。

波乱万丈ともいえる時代が、一人の一生を通して描かれる。背景に映る世界戦争の中で、エッガーの思考は奇妙なほど淡泊だ。まるでクラシックを聴くように人生は流れ、無声映画を見のように一生は終わっていく。そこに教訓はない。永遠を追いつめた男でもなければ、夢に人生を賭けた男でもなかった。一人の女を守ろうとして、守りきれないまま生き続けた。それでも彼の人生には何かがあった。何かが心を響かせるのだ。

生きる意味は渦中にある間は捉えられず、完結して初めて分かるものなのかもしれない。自分の一生を眺めることは難しいから、代わりに本書を読んでみては。意味と無意味の間で揺れる、ある一生を。

(二六〇頁 本体一七〇〇円 6月刊)

三 体

劉慈欣著

立原透耶監修

早川書房

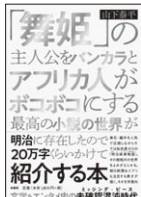


彼女の絶望が、すべての始まりだった。物理学者の父を文化大革命で惨殺された科学者、葉文潔。絶望の中で、彼女は思いを馳せる。ここではない、どこか別の場所に――。

父親の死後、失意の中を過ごす彼女は、ある日巨大なパラボラアンテナを備えた謎の軍事基地「紅岸」にスカウトされる。そこでは人類の運命を左右する極秘プロジェクトが行っていた。数十年後、ナノテク素材の研究、汪淼は、ある会議に召集され、世界的な科学者が次々自殺している事実を告げられる。事件を追っていくと、異星を舞台にしたVRゲーム「三体」が走査線上で浮かび上がった。三つの太陽。盛衰を繰り返す文明。始皇帝とアインシュタイン……。数多の謎に直面し、彼は「三体」の世界に没頭する。後日「三体」のオフ会に招待された彼は、俄かには信じがたい事実を告げられる。「三体」はゲームの話ではない。この惑星は実在すると――。

これはゲームか現実か？ 惑星「三体」の存在は「紅岸」の構成員のみが知っている。「三体人」を受容するか、排斥するか。軍事基地「紅岸」では、まさに地球の運命を左右する会議が行われていた。汪淼は国家機密の「紅岸」の会議に招待されるが、そこで彼を待っていたのは彼が良く知る人物だった――。本書は惑星運行に関する「三体問題」から名付けられた。アジア圏初のヒューゴー賞受賞、日本で発売一週間で八刷など、その話題性はまさに天文学的だ。本書の持つ引力は、我々地球人を引き寄せて放さない。(出席点) (四四八頁 本体一九〇〇円 7月刊)

「舞姫」の主人公をバンカラとアフリカ人がボコボコにする最高の小説の世界が明治に存在したので20万字くらいかけて紹介する本
山下泰平著 柏書房



『吾輩は猫である』『雁』『当世書生気質』『蒲団』『明治期の日本文学の代表例として歴史の時間に習ったことがある。だが実際にこれらの本を全て読んだ人がどれだけいるだろう。文学作品として有名でも時が経

ては読者は離れる、まして名すら残らぬ有形無形の作品は今時誰も読まぬ。しかしたまたまそんな作品を掘り起こそうとする奇特な人が現れる。それが本書の著者であり、本書はその収獲物の紹介である。

本書の対象は明治期の娯楽物語と呼ばれる大衆向けの小説。活字を求める人々の需要に応じてSFや世界旅行やバトルなど様々な作品が生まれた。現在のラノベに似ているといえる。何か荒っぽい要素があるのは江戸時代に人気だった講談本の後継だからか。例えば本書の長いタイトルの「示す物語、『蜚カラ奇旅行』というのだが、『坊っちゃん』的蜚カラな主人公が拳一貫でハイカラを退治するため西洋旅行を試み、行きの船で同乗した『舞姫』のエリスの悲恋に同情して豊太郎への敵討ちを約束する。途上で拳の鉄鎧を下して金持ちになり、パリで次々とハイカラ西洋紳士を殴り倒し、しまいに蜚カラのアフリカ人と友達になり……という、色々なテーマを含んだ上に文学作品のパロディにもなっている。文学作品の設定をも取り込みつつ大衆受けする要素を散りばめた娯楽物語は当時文学作品よりも人気だった。

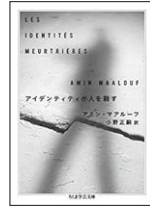
これまで光の当たらなかった大衆小説という分野が今、読み直すと面白い。(ねこ)

(二八一頁 本体一八〇〇円 4月刊)

アイデンティティが人を殺す

アミン・マアルーフ著
小野正嗣訳 ちくま学芸文庫

国境に壁が立ち、ブレクジツトが問われ、旭日旗が風に揺れる時、右傾化やポピュリズム



と同じくらい重要な言葉がある。それがアイデンティティだ。原題は「殺人的なアイデンティティ、あるいは、どのようにしてヒョウを飼ひ馴らすか」。迫害されても人を殺し、自由にしても人を殺すヒョウのように、アイデンティティは我々に牙を剥いてくる。

レバノン生まれでフランスに移住した作家アミン・マアルーフによるアイデンティティ論。複雑なバックグラウンドをもつ彼だからこそその洞察と分析が本書には宿っている。

近代化には普遍化という側面がある。発展する社会は豊かさの裏に、自身の一部を喪う屈辱と否認があった。時代の変化が早ければ尚のこと、憧憬の思いのごとく、自分たちの生活が「奪われた」という声が強くなった。自身を犠牲者として語るその文脈は、単一のアイデンティティを希求する欲望へと変わっ

てしまう。精神的支柱を求める願いは、他者を排除する集団へと様変わりする。

本書は一貫してアイデンティティの複数性に目を向けることを提唱する。どんな人にとっても自分の存在を単色で描くことは出来ず、多くの色の中で描かれるはずだ。多様な帰属性を自分の中に見つけること、そのような自覚が文化や集団を超えていく力となることを著者は訴える。

自分自身を単純化させないこと。簡単なようで難しいこの意識が、獐犇な猛獣からあなたを守る手綱になるはずだ。(きもの)

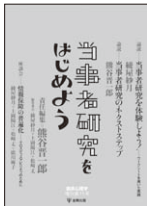
(二〇八頁 本体二一〇〇円 5月刊)

当事者研究をはじめよう

(臨床心理学 増刊第11号)

熊谷晋一郎責任編集

金剛出版



当事者研究は、北海道にある精神障害等を抱えた当事者の地域生活拠点「べてるの家」

で始まった。研究の出発点は、「抱えている困りごとや苦勞、気になる自分の特徴やクセ」であり、その大小は問われない。当事者

研究は誰にでも開かれた研究なのだ。

本書は当事者研究を総花的に紹介した『みんなの当事者研究』多くの当事者を編集委員として招いた『当事者研究と専門知』に続き、より実践的な「当事者研究のやり方」を紹介する本となっている。第一部から順に読めば、当事者研究の理念と歴史を踏まえうえて、研究グループの立ち上げと維持の事例を学び、研究の実践へと移ることが出来る。入門書としてよくまとまっているといえよう。

特筆すべきは第四部「当事者研究の実践」である。綾屋紗月が研究テーマの設定から実験報告に至る八つのワークを具体的に紹介しており、付録「当事者研究実践のためのツール」を用いれは誰でも研究の一端を体験できる。さらに、付録のワークシートを用いた研究実践報告に加え、記録・まとめ・発表の仕方についてもまとめられており、すぐにでも当事者研究に参加できるような気分になる。

当事者研究は、あまり深く考えすぎず、とりあえずはじめてみるのがよいと言われており、WEBサイト「当事者研究ナレッジベース」には様々な困り感から出発した研究がある。あなたが抱える悩みも、当事者研究の対象である。本書を読み、とりあえず、なんとか、研究を始めてみよう。(石透)

(二〇三頁 本体二四〇〇円 8月刊)

圏論の道案内

西郷申矢人、能美十三著
技術評論社



数学とは異なるものに同じ名前を与え、与える技術である、というポアンカレの言葉がある。こ

れは、例えば「数」の概念とほぼどのようなものか、思い返してみれば納得のできる主張だろう。「圏論」という分野は同一視する技術としての数学の極致である。今日ではコンピュータ科学から物理学、果ては哲学まで幅広い領域に应用されているため、その存在を耳にしたことのある読者も多いことだろう。

本書は、圏論に入門するための手引書である。入門書も数多く出版されている本分野であるが、どちらかといえば重めの書物が多く、特に初学者の独学にはかなりの根気が必要であった。なじみやすい具体例を交えつつ対話形式で解説する本書は、内容的にも物理的にもコンパクトにまとまっており、最初の一冊として非常に適している。扱われる話題は、圏論の初歩から応用的なまでのさまざまなあり、その全体像をつかむことができるだろ

う。特に、コンピュータ科学との関連で圏論に興味を持った人にとっては、初学者向けに「モノイド」の概念の解説がなされている点でも一読の価値がある。総じて平易な本書であるが、扱われる概念が極めて抽象的なので、紙とペンで一步一歩確かめながら読み進めたほうが理解しやすいかもしれない。また、誤植などの情報もWEBページで公開されているので、参考にするとういだろう。

圏論という分野の存在は知っているが、自身はよく分からないという人なら特に読んで得るところの多い一冊である。

(二八〇頁 本体一八八〇円 8月刊) (藤餅)

絵画へ

1990-2018美術論集

母袋俊也著
論創社



本書は、長く東京造形大学で教鞭を執ってきた画家・母袋俊也の絵画を巡る制作と考察の記録である。母袋俊也は東京造形大学を卒業後、一九八〇年代に旧西ドイツのフランクフルト美術大学において画家であり美術理

論家であるライマー・ヨヒムスに師事し、帰国後は絵画におけるフォーマートと精神性の問題を、作品制作と大学での研究との両面にわたり追究し続けている。これまで、埼玉県立近代美術館、越後妻有アートトリエンナーレ、さらには奈良町現代美術館等で作品を発表してきた。本書はこの稀有な現代画家のこれまでの歩みを、論考、対論、随考、断章の四部構成において纏めた集大成である。

第一部においては、画家がこれまで中心的に考察してきたフォーマートと精神性の問題をめぐる論考がなされ、日本における障屏画の偶数性、西洋の祭壇画における奇数性、両者の中心の有無を巡る考察がなされる。第二部の対論においては、現代日本の第一線で活躍する美術館学芸員、批評家、研究者との対話を通じて、絵画における主題性、リアリティー、シミュラクル、色彩とその有機性等に関する考察がなされ、母袋俊也の制作と研究が、二〇世紀後半から二一世紀にかけて抜け落ちてしまったものを再び絵画に取り戻させる試みであることが本書を読み進めるに連れて浮かび上がる。卓越した画家の思考と制作の軌跡が、優れた聞き手との対話を通じて見事に引き出された貴重な記録である。

(四三〇頁 本体三八〇〇円 4月刊) (投稿・M・N)

神の三位一体が人権を生んだ

現代思想としての古代・中世哲学

八木雄二著 春秋社

西洋近代が生み出した普遍的理念である人権。しかし、この概念は今や社会を営む共通前提となっていながらも、その意義は未だ漠然としか了解されていないのではないか。人権を概念的に把握するには、その根源たる中世哲学のペルソナ論、さらには神の三位一体論に遡らなければならないと本書はいう。

西洋近代が生み出した普遍的理念である人権。しかし、この概念は今や社会を営む共通前提となっていながらも、その意義は未だ漠然としか了解されていないのではないか。人権を概念的に把握するには、その根源たる中世哲学のペルソナ論、さらには神の三位一体論に遡らなければならないと本書はいう。



単純化していえば、ペルソナとは理性をもつ個のことである。父・子・聖霊という神の三つのペルソナにおいて、理性は普遍的本性として共有可能なものでありながら、ペルソナ自体はそれぞれ異なる個として区別される。他者の人権を尊重するにはその人格を認識しなければならないが、理性の抽象による概念認識ではその個性を捉えられない。人格を把握できるのはドゥッンス・スコトゥスによれば個々の場面における理性の直観であり、ソクラテスの言葉を用いれば、心の「気づき、気づき、配慮する」はたらきである。それはま

たキリスト教的に換言すれば、相手の存在そのものを受け入れる神の愛だ。神の存在証明と国家の存在の関係や、生の実感をいかに得るか、といった他の主題についても論じられるが、先に挙げたようにソクラテスと中世哲学の関係をめぐる思索に本書の特長がある。たとえば心の「正直」を重んじるアンセルムスの真理観が、ソクラテスの無知の自覚に重ね合わせられる。またクセノポンに依拠したソクラテスの再解釈も新鮮な魅力を感じさせる。中世哲学について詳しくなくとも興味深く読める一般書だ。(霊人)

(二五六頁 本体二八〇〇円 6月刊)

科学の女性差別とたたかう

脳科学から人類の進化史まで

アンジェラ・サイニー著

東郷えりか訳 作品社

「男脳」／「女脳」／「男は論理的」／「女は感情的」……こうした言説は枚挙にいとまがない。これらは一見して非科学的だ。しかし実際は科学こそが性差の言説を嚮導してきたことを本書はあぶり出し、英国物理学会



誌で二〇一七年ブック・オブ・ザ・イヤーに選ばれた。科学ジャーナリストによる、最新の知見を豊富に盛りこんだルポルタージュだ。性差の言説の一例をあげよう。新生児の振る舞いに顕著な性差が見られたという実験結果が二〇〇〇年に公表された。男女の脳の違いをも示唆したこの論文は三〇〇回以上引用されているものの、実験は一度も再現されたことがなく、実験方法にも問題があったことがこゝで指摘されている。しかしそうしたことが以上に著者が問題視するのは、男女の脳の差異はごくわずかなのに、そこにはかり関心が向けられてしまうことだ。男女の性格や能力の重なりを調査した二〇〇五年の統計では、ほとんどの項目で標準偏差の一〇分の一未満の差しかなかった。心理的にも知的にも、性差はほとんど存在しないのだ。にもかかわらず、脳から性差を探し当てようとした科学者はなお多い。性を二項対立的に考える思考法がいかに根強いかがつかされる。

科学においては「性差別主義に聞こえる」ときが、学説を禁じる正真正正な理由にはならない——この常套句を、いま一度批判的に考えてみなければならない。客観的に性差を捉えているつもりが、「性差の神話」に囚われているだけなのかもしれないからだ。(ミセ)

(二二六頁 本体二四〇〇円 5月刊)

ミュシャから少女まんがへ
幻の画家一条成美と明治のアルヌーウォー

大塚英志著 角川新書

一九世紀末フランスにおいて一躍有名となったアルフォンス・ミュシャ。最近では少女マンガとの関連で見直されることの増えている彼の作品は、日本でもフランスと間を置かずに受容され始めた。その影響を受けたのが文芸誌『明星』であろう。

文学少女たちの投稿と新進気鋭の作家・歌人たちによる作品の集う『明星』。この雑誌の創刊初期に挿絵画家として人気を博したのが本書で取り上げる一条成美だった。少女をモチーフとした彼の挿絵にはミュシャの作品の影響が窺える。しかし『明星』から別の文芸誌へ移籍して挿絵を描き始めて以降、彼の知名度は下がっていった。『明星』は反対にミュシャを積極的に模倣した藤島武二や彼の属する「白馬会」の表現の場となり、アル・ヌーヴォーデザインズの文芸誌として名声を高めていく。

藤島の活動等については他の多くの書物で触れられているだろう。しかし、その陰に埋もれた一条成美という画家の存在を掘り起こした本書は意義深いものである。（ねこ）

(三六八頁 本体二一〇〇円 7月刊)

物語 オーストリアの歴史

——中欧「いにしえの大国」の千年

山之内克子著 中公新書

オーストリア、と聞いて何を思い浮かべるだろうか。音楽の都ウィーン？ ハプスブルク家の華々しい歴史？ それだけではない。本書は、ウィーンやハプスブルク家の記述に偏りがちなオーストリア史を、九つの州それぞれについて記述するという手法で描き出している。たとえば南東部に位置するシュタイアマルク州。州の北部は山がちで南部にはブドウ畑が広がり、北方文化と南方文化との接合点として開放的な雰囲気を持つ。ブルゲンラント州は最後にオーストリア領となつた州で、それまでハンガリーの支配下にあつたため、現在も過去の多民族国家の名残をとどめている。ケルンテン州は四方を山嶺に囲まれ、ハプスブルク家の居城が置かれたことがないなど歴史的にも中央から隔絶しており、閉鎖的な性格からハイターなど右翼政治家の母胎となっている。地理的特徴や歴史的歩みからその州の特性を示す手法が鮮やかだ。

日奥が国交を結んで、今年で二五〇年。この機会に、多彩な顔を持つオーストリアについて、学んでみてはいかがだろうか。（ミセ）

(四五二頁 本体一〇〇〇円 6月刊)

天才と発達障害

岩波明著
文春新書

私たちは「天才」と呼ばれる人々に憧れるが、「天才」達にも苦しみはある。野口英世、ダーウィン、モーツァルト、ヴィトゲンシュタイン……これらの人物は現代まで学術や文化の面で大きな影響を及ぼし続けている。「天才」達だが、彼らはその人生においてADHDやASD、および鬱などの精神疾患を抱えていた。本書はそれらの障害が、彼らの功績に与えた影響を功罪両面から考察している。

例えば、野口英世は研究ではすさまじい集中力を発揮し様々な業績を残したが、私生活では方々に借金を繰り返しては豪遊を続けていた。筆者はこの驚異的な集中力と計画性の無さがADHDに起因すると考えている。

彼らの多くは日常生活においては人間関係の破綻や幻覚や被害妄想に苦しみ、社会生活への適応が不十分であった。本書の後半では現代におけるそのような人々を支えるためのアメリカやイスラエルの取り組みが紹介されており興味深い。自らの特性について考えること、および他者を理解するきっかけともなる一冊である。

(二五四頁 本体八二〇円 4月刊)

ナルシシズムの出口は何処に

本年七月に出版された、川上未映子

『夏物語』（文藝春秋）。パートナーが
らずセックスもできない三八歳の主人
公・夏子は、AID（第三者からの精子
提供による人工授精）で子どもを産もう
と考える。生殖にもう男なんて必要ないと思まくシングルマザーの
遊佐。子どもを産むなど凡庸な女のすることだと切り捨て、五〇
近い独身の仙川。幼少期に性的虐待を受け、子を産むことは暴力だ
という善。女たちの叫びのポリフォニーをみずからの内で反響させ
ながら、夏子は最終的に子を産むことを選ぶ。



「女が決めて、女が産むんだよ」
生殖技術が発達して、結婚とセックスと生殖の結びつきが解消さ
れつつある現代。遊佐はAIDで子を持つとする夏子を絶賛する。
「子どもをつくるのに男の性欲にかかわる必要なんかない」「……」
もちろん女の性欲も必要ない。抱きあう必要もない。必要なのはわ
たしらの意志だけ。女の意志だけだ。AIDの精子ドナーは匿名
だ。生殖の相手となる男を精子というただの物質に還元してしまっ
以上、これは単性生殖のような様相を帯びてくる。

ここで、上野千鶴子『スカートの下の劇場』（河出文庫）におけ
る、女性の持ちうる二種類のナルシシズムに目を向けてみよう。一
つは、自己客体的ナルシシズム。これは、性的主体である男性に
とって望ましい身体であることにみずからの価値を見いだす状態であ
り、他者のまなざしに左右されるため自己疎外的なものとなる。
もう一つは、自己充足的ナルシシズム。それはとりわけ出産のさ

いに現れるもので、男性からの評価を必要とせず、自分の身体を自
分のためだけに使うということに満足している。女の身体は女のもの、
夏子は遊佐の考え方に共鳴する。しかし物語終盤で、このナル
シシズムは一種のいびつさを露呈しはじめるように思われるのだ。

ナルシシズムと他者

最終的に夏子は、匿名の男性の精子を用いるAIDではなく、互
いに惹かれあっている逢沢の精子で人工授精を行う。しかし授かっ
た子は基本的に夏子が「ひとりで産んで、育てていきたい」という
子を持つことについての逢沢の思いは描かれない。だれの精子であ
るかにはこだわりながらも、すなわち精子と人格とを結びつけなが
らも、父として産み育てることからその人格を疎外する——夏子に
とって逢沢はなんなのだろう、と疑問に思わずにはいられない。

また、物語のキーパーソンの一人、善百合子の言葉も別の問題を
提起する。子を産みたいと望む夏子に、善は語りかける。「どうし
てこんな暴力的なことを、みんな笑顔でつづけることができるん
だろうって。生まれてきたなんて一度も思っただけでもない存在を、
こんな途方もないことに、自分の思いだけで引きずりこむことがで
きるのか、わたしはそれがわからないだけなんだよ。出産は、自
分だけの出来事ではない。子どもという一人の他者をその者の意志
に関係なく生み出すことであり、出産は親のエゴだと善は断じる。
善にたいして夏子の出した答えは、反論としては弱い。ここに、出
産をナルシシズムとして捉えることの限界を感じてしまう。

自分の身体を取り戻した女たちは、出産とどう向きあうべきなの
か。川上の渾身の問題提起に、答えなければならぬ。（三セ）

無宗教から宗教を学ぶ(前編)

「宗教」と聞くと、大抵の者は身構える。宗教は危ない。人を「洗脳」するからだ。信する者には安心を与えるのだろうか、心の自由と引き換えに、である。そんなものに頼るのは、もともと心が弱いのか、何か特別な事情があるからに違いない。少なくともいま自分には宗教なしで幸福だし、金輪際関わるつもりもない……。

よろしい。健全な感覚だとさえ思う。しかし筆者は主張したい。それでも宗教について学ぶべき、いくつかの理由がある、と。

(一) 批判 (Critical) として

そもそも日本社会での大方の「無宗教」は、「宗教心」と呼ばれ得るような感性の欠如を意味するのでは、必ずしもない——阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』(ちくま新書)はそう説き起す。多くの人が自分を無宗教と思うのは、キリスト教やイスラームなど、創唱者が存在し、自覚的信仰からなる宗教をモデルにするからだ。

しかし宗教を更に掘り下げて、人間がその有限性に目覚めたときに出てくる人間にとって基本的な営みと理解するならどうか。創唱者も信仰の自覚もなくとも、人間を超えたもの(神仏)への自ずからなる感覚・習俗とともに生きてきた人々のあり方は、既に宗教的だ。またごく曖昧にであれ、今なお広く保持されているその感覚と習慣も、宗教と呼ばれてよい。阿満は問う。では何故、人々は伝承され生活に浸透した宗教を宗教と思わないのか。事は、明治以来の日本国家の宗教政策と関わる。ここでは、在来(従来)の宗教性は排除されるか神社神道へと取り込まれ、宗教ではないとして他の「宗教」から区別される。各地の習俗が国家的に整理される一方、諸「宗教」は「私」の領域に押し込まれて無力化された。この事情を振り返りつ

つ阿満が探るのは、宗教心が収奪されず、不必要に等閑にもされないような回路である(同『宗教は国家を超えられるか』も参照)。

阿満が大枠を跡づけた明治以来の宗教事情について、先行言説を鮮やかに整理し、国家神道の全体像を新たに呈示したのが、島園進『国家神道と日本人』(岩波新書)だ。島園は、国家神道の問題を単に神社神道の(神社神道という)一宗教が国体と結びついた点に関する問題に縮減する主流的理解を、それが依拠する方法論の不備を指摘して丁寧に反駁してゆく。そうして彼は、明治国家の当初からの一貫した理念が天皇祭祀を中心とする祭政一致の体制にあり、国家神道の問題はこの理念の問題として理解されるべきだということ、思想史の方法論を踏まえてあらためて示す(この理念実現の布石として組織されたのが神社神道だ)。国家神道の真の問題とは、明治に復興された天皇祭祀の存在それ自体なのだ。ここから島園は戦後解体されたと思われるがちな国家神道がなお存命であることを、様々な例から指摘する。『近代天皇論』(集英社新書)で島園と対談した片山杜秀の言葉でいえば、今なおそれは、場合によっては例えば近代民主主義を直ちに「チャラ」にできる潜勢力を持っている。

まとめよう。宗教など関係ない生活をする者にも、宗教を学ぶべき理由がある。それは、人間的生が宗教として問題になるもののもとへと開かれており、このことは自覚化を、そして時には批判的吟味をも要するからだ。とは言え、こうした議論が一層意味を持つにはこの生の事実がいかなる意味で言われ得るかが、更に掘り下げられる必要がある。この方向での宗教の探求は、単に批判に止まらない、自由で創造的な意味を持つてくるはずである。

(投稿・犬)

編集後記

すっかり秋めいてきた。夜、大学からの帰り。自分の体温とそう変わらない気温の夏は、空気のなかに体が溶けていく感じがした。でもある日を境に空気が引き締まって、自分の輪郭がはっきりとする。わたしはわたしではないのだ、と自覚されるも、寂しくはない。空が高い。吸いこんだ空気は胸一杯、月は遠いが、十分手が届く。

こんなことを書いているのも、わたしがようやく、季節の移ろいなるものを感じる事ができるようになったから。外の世界に耳をすますことを覚えた。暮れる空の色に、野菜を切る手ごたえに、あのひとの咳払いに、気づいて、拾っていく。集めたものでつくった世界は、最早わたしそのものだ。そういう世界の話、だれかとしてみたい。(ミセ)

【書籍の価格表示変更のお知らせ】

10月からの消費増税にともない『綴葉』では、書籍の価格を、従来の税込価格にかわって本体価格(税抜)で表示することとなりました。何卒ご了承のほどお願い申し上げます。なお、京大生協組合員は、生協書籍部にて10%引きで書籍を購入することができます。ぜひともご利用ください。

当てよう! 図書カード

長い長い大学生の夏休みを読者の皆さまはどのように終えましたか。私は、京都出身のバンド、「くるり」が9月末に毎年開催している「京都音楽博覧会」、通称「音博」で今年の夏を了いました。今年は17年ぶりに再結成したあるロックバンドが出演したのですが、そのバンドは以下のどれでしょう。

- 1.YES 2. THEE MICHELLE GUN ELEPHANT
- 3.ELLEGARDEN 4. NUMBER GIRL

(石透)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(またはe-mail:teiyo@s-coop.net)。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは11月15日です。

6月号の解答

6月号の「以下の期間に公演がある作品はどれでしょう?」の答えは2. お気に召すままでした。もうすぐ京都国際舞台芸術祭。どんな舞台が見られるか楽しみです。応募者12名中11名の方が正解でした。図書カードの当選者は、Hurdlerさん、深みの巡礼者さん、芙蓉さん、かえるさん、Sosoさん(順不同)です。おめでとうございます。(ミセ)

読者がらひひひ

○食堂にて、目の前で見知った教授が『綴葉』を手取る姿を見て、つられて手に取ったのですが、非常に本への興味がそそられる良誌だと思った。(法・たんま)

— ありがとうございます。周りの知っている人をおして、知らない本の世界へといざなわれるのは貴重な経験ですよ。知見を拡げ、教養を深めるとき、そのような些細なつながりはかえって意義深いものです。これからも是非ともよろしく願っています。

○最新刊買い過ぎて、お金が。何とかして! (文・竹生島)

— 節約するべきかもしれません。ところで、今月号は「1000円で買える本」という特集を組んでみました。本に限って言えば、値段がその価値の指標ではないでしょう。安価で購入できる良書もきっとたくさんあります。是非、手に取ってみてください。

○知り合いに紹介され手に取りました。今後、もう読もうと思います。(文・かえる)

— ありがとうございます。そうして本書評誌がたくさんの人々とながっていくのは大変ありがたい限りです。紹介してくださった知り合いの方にも感謝です。(三ツ葉)